「白紙の上で」

国際文化交流学科　水口　亜侑美

「曲線」

曲線をたどっていくと
始まりにたどり着く
縁取られたその線は
何かを形づけたその線は
曖昧に
かつ明確に
終点を隠している

最短距離を求めて
私はいつも直線を描いた

曲がってもいいのかな
波打ってもいいのかな
交わってもいいのかな
時間かけてもいいのかな

私はただ
自分自身と理想を結んだ
その線上を歩きたい

曲がったって構わない
不明慮でも構わない
この手で描こう

たどり着く場所は知っている

「パズル」

理想と現実の間で揺れている
不良品のパズル
全てが組み合わないこと
あらかじめ知っていたなら

ただ一ピース
たった一ピース

合わない形の一ピース
それなら
やすりで削ってみよう

異なる図柄の一ピース
それなら
新たに描き直そう

存在しない一ピース
それなら
自ら作り出そう

迷うことを恐れていたら
いつまでたっても
未完成のままだ

選択肢は無数に広がる
完璧でなくとも
完成するはずだから

最後の一ピース
君を見つけるまで
私はパズルを作り続ける

「色彩」

色彩を心に宿している
自由に描いている
塗り重ねていく
深みを増していく

勝てない
優れない
乗り越えられない
頂上の見えない階段を目にして
私の心は青かった

深みを増していく青い心は
誰かが与える無償の愛に
安らかな時間の流れに
薄まり消えゆき
空色に変わる

空を眺め
考える
見つめ通しても
絶対に知ることのできないものが
確かにあるということ

心に反射した光
眩しさゆえに振り返られない
前に進まなくては
夕日が沈む前には
深紅のしずくを落としておこう

抽象的に感情を紡ぎだし
それらを描いては消してゆく

自分だけの色彩を
心に宿している

「軸」

夢を見ている
愛を信じている
存在するものだと
信じようと
目を閉じ

でも知っている
夢の中でさえも
目にすることはできないと

物質的ではない
決して形づけて
この手で触れ
眺めることはできないと

それでも諦める術を知らない
愛に確かに触れてみたい

心に迸る　甘辛く痛痒い
形容し難い感覚
心を動かし
不確かに波打ち
打ち寄せる想いを
消し去っては荒立て

ああ
愛が全ての軸ならば
失った時
悲しくも崩れ落ちるだけだ
透明人間のごとく
無色の無意味な塊でしかない

見返りを求め
立ち止まっては振り返り
足跡をたどる
何かにつまずき
それでも追い求め

真っすぐな瞳で
真髄に手を伸ばし
真っすぐな心に
躊躇する

ああ
この感情をどう伝えよう

微かに聞こえる

愛を与える代わりに
愛を得るなんて
そんなの
我儘過ぎやしないか

一方通行
侵入禁止
制限された道の中で
全てを抱えて
欲を満たし
愛を満たし
生きていくなんて
我儘過ぎやしないか

失っては補い
繋げては壊し
磨いては塗り重ね
新たな喜び
確かな信頼
揺らぐことのない軸を
築き上げていく

愛を与えたい
愛を伝えたい
失っても構わない
与え続ける人間で在りたい

愛を見失うその瞬間に
愛を得たいと切実に願い
夢を放ったその瞬間に
静かに愛を葬った

「潔白」

嘘を重ね
積み重なって出来上がった
虚像の砦
光を閉ざし
腐らせていく
私の手で造られたものを
跡形もなく
溶かしてゆく

心の中の真実は
当たり前のように矛盾している
私は　私は
私は　私は
一体幾つのニセモノの種をまき
自らを殺していくのだろう

私は　私は
完全を求めている
塵ひとつない潔白を求めながら
冷たい影を落としていく

私は
定規を手に曲線を描いている
私は
未完成のパズルを前に
途方に暮れている
私は
心を支える軸の色彩を
失いかけている

淀んだ真実から
幾度となく目を背けた

それでも
この白紙の上では
自分自身を一から描き
見つめざるを得なかった

ああ
私は
嘘を重ね矛盾とともに
何度だって自らを殺すだろう

潔白に近づけていく何か
それを探し続けている

真っ白い世界でただ一人
探し続けている